

聖書：ローマ 11：1～10

説教題：残された者

日時：2016年2月28日（朝拝）

ローマ書の9～11章。「イスラエルの不信仰の問題」が扱われているやや難解な部分を読んでいます。今日はその三つの章の内、最後の章に入ります。問題になっているのは、これまで長い間、神の民として導かれて来たイスラエルが約束のメシヤを受け入れなかったということです。メシヤへの信仰に向かって育てられて来たはずなのに、本体が現れたら、彼らはこの方を拒絶した。そしてキリスト教会に連なっていない。これをどう考えたら良いのか。ユダヤ人はこの結果、救われないのでしょうか。彼らに対する神の約束は無効になったのでしょうか。旧約の歴史は全部ムダになったのでしょうか。これに対してパウロは「絶対にそんなことはありません」と言いました。まず9章では「イスラエルから出る者がみなイスラエルなのではない」と言いました。肉の子どもがそのまま約束の子どもなのではない。イスラエルの中にまことのイスラエル、霊的イスラエルがあると言われました。そして誰がそのまことのイスラエルであるかは神のあわれみの選びによると言われました。続く10章ではイスラエルの責任という観点から考えられました。彼らは自分自身の義を立てようとして、神の義に従いませんでした。彼らの反抗的性質について、10章最後の21節にこうありました。「またイスラエルについては、こう言っています。『不従順で反抗する民に対して、わたしは一日中、手を差し伸べた。』」

そして今日の11章へと入ります。ここで問われていることは、このように神に不従順で反抗し続けたイスラエルを神は退けてしまわれたのかということです。この関心は「民族としてのイスラエル」を神は捨てたのかということです。これまで神の民として特別に選ばれ、導かれて来た、その関係は解消されてしまったのか。神はイスラエルをいわば離縁されたのか。これが11章のテーマです。これに対してパウロは1節で「絶対にそんなことはありません」と言います。すなわち彼の主張は、神はなおイスラエルとの関係を保っておられるということです。旧約からの関係を継続して、なおイスラエルを恵みによって導き、用いられるということです。

パウロはその根拠として、まず自分のことを述べます。1節：「すると、神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。絶対にそんなことはありません。この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫に属し、ベニヤミン族の出身です。」彼はこ

ここで「イスラエル人」とか「アブラハムの子孫」とか「ベニヤミン族の出身」と並べています。彼も以前は他のユダヤ人と同様、神に逆らう者でした。キリストを受け入れず、クリスチャンを迫害し、神の教会を迫害していました。しかしその彼が今や救いの中に入れられています！これは神が民族としてのイスラエルを退けていない生ける一つの証拠だと言っているわけです。

次に示しているのは、聖書がエリヤに関する箇所で行っていることです。3節で引用されている言葉は、エリヤがバアル預言者との対決の後で語った言葉です。当時イスラエルは偶像礼拝に染まっていた。その状態からイスラエルを引き戻すために、神はエリヤを遣わしてバアル預言者との対決を導かれました。その結果、民は主こそまことの神であると認めて、主に立ち返りました。しかしこれを聞いたアハブ王の妻、悪女イゼベルが腹を立てて、エリヤを必ず殺すとの誓いを立てます。それでエリヤは恐れて荒野へ逃げて行きます。あれだけ活躍したエリヤも、ここに至っては心身ともに疲れ果てて、「主よ。もう十分です。私のいのちを取って下さい。」と言うまでになります。そして3節の彼の言葉が続きます。「主よ。彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇をこわし、私だけが残されました。彼らはいま私のいのちを取ろうとしています。」これに対して神は何とお答えになられたでしょう。4節：「バアルにひざをかがめていない男子七千人が、わたしのために残してある。」

これは何を語っているでしょう。エリヤはこの時、イスラエルの状況を悲観的に見ていました。イスラエルは偶像礼拝の状態にありました。その中でエリヤは預言者として活躍しましたが、今やいのちをつけ狙われています。もはやこうしてあなたに対して従っているのは私一人だけです！と彼は言っています。ところが神は言われました。「いや、バアルにひざをかがめていない者、すなわちわたしに対して忠実な者が7000人いる！」と。エリヤとしては、え？どこに？という思いだったでしょう。信じられない数字です。そして神はただ「7000人いる」と言われたのではなく、7000人を「残してある」と言われました。すなわち神がそうしておられるのです。これは神のわざなのです。このローマ書が書かれた当時も、人間の判断ではユダヤ人がみな拒絶しているようでした。信じる者はほとんどいません。悲観的な状況です。まさにエリヤが置かれた状況とそっくりです。しかし神はここでもあのエリヤの時と同じことをすることができるのです。神はそれをただご自身の恵みによってなさるのです。5～6節：「それと同じように、今も、恵みの選びによ

って残された者がいます。もし恵みによるのであれば、もはや行ないによるものではありません。もしそうでなかったら、恵みが恵みでなくなります。」

ですから私たちは自分勝手な判断で悲観的になってはいけません。神は私たちの知らないところで、ご自身の働きをなすことができます。7000 人という言葉に象徴される、私たちの思いをはるかに超える恵みのわざをなすことができます。このような仕方では神はイスラエルを捨てず、残された者を備えて、引き続き導いておられるとパウロは言っているのです。

このことを踏まえて7節で「では、どうなのでしょう」とパウロは問います。イスラエルの中になお残された者がいるということは分かりました。しかしイスラエルの国全体として現実にどうなのでしょう。7節に「イスラエルは追い求めていたものを獲得できませんでした。」とあります。ここの「イスラエル」とは、全体としてのイスラエルという意味です。イスラエルは全体として追い求めていたもの、すなわち義を得ませんでした。確かに一部の者は恵みによってそれを獲得しました。素晴らしいことです。しかしその他おおぜいの者についてはどうなのでしょう。パウロはここで、イスラエルの大部分の「他の者」は「かたくなにされた」と言っています。すなわち神によってかたくなにされた。すでに9章18節で見ましたように、これは彼らに対するさばきとしてこうされたということです。8節に「神は、彼らに鈍い心と見えない目と聞こえない耳を与えられた。今日に至るまで。」とあります。彼ら自身が心を閉ざし、かたくなな態度を取ったので、神は益々彼らの心が鈍くなるように、また真理が見えなくなるように、また御言葉に耳を貸さなくなるように導かれた。9～10節も同じです。9節に「食卓」とありますが、これはイスラエルに与えられていた様々な祝福や特権を指していると思われます(9章4～5節)。しかしその特権を軽んじていると、与えられていた祝福がのろいに転じてしまう。祝福がわなとなり、網となり、つまずきとなる。9節最後には「報いとなれ」とあります。「報い」という言葉は、やはりその前提に彼らの悪があることを意味しています。ですからこれは彼らの悪に対するさばきなのです。そういう彼らには10節にあるように、その目がくらんで見えなくなり、その背はいつまでもかがむという罰が与えられる。

私たちはここに改めて特権を軽んじることの恐ろしさを思わされます。与えられている特権にどう応答するかは、その後の私たちに大きな影響を与えるのです。す

なわち今、それにかたくなな態度を取れば、次回はもっとかたくなな状態になる。神によってそうされてしまう。逆に今、神とそのメッセージに対して心柔らかに応答すれば、次回はもっと柔らかな心を与えられ、益々良く見えるようにされる。イエス様の次のことばが思い浮かんで来ます。「持っている者はさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられるのです。」

しかしパウロがここで言いたいメッセージは、今回の 11～12 節にも少し触れないと良く見えません。そこを見る時に分かることは、実は話はこれで終わりではないということです。不従順なイスラエルをかたくなにすること、それ自身が目的ではない。実はそこには神のさらなる目的があるということが 11 節以降で語られます。詳しくは次回見ることでありますが、少し触れれば、それはこのことによって異邦人に救いが及ぶためということです。イスラエルがかたくなにされることによって、福音は異邦人に及ぶようになるのです。そしてさらにそのことを通して神はイスラエルにねたみを起こさせ、イスラエルに祝福が戻って来るように事を導かれると言われて行きます。この流れを心に留める時に、神は民としてのイスラエル退けていないことが良く分かるのです。神は今なお、残された者を残すことによってイスラエルを顧み続けておられますが、他の者をかたくなにすることによってもイスラエルを心に留めておられる。そのことを通してイスラエルに祝福が戻って来るように取り計らわれるのです。神はこうしてイスラエルを捨てておられないということをパウロは語って行くのです。

以上のことから 2 つのことを今日は心に留めたいと思います。一つは神は真実であられるということです。多くのユダヤ人が福音を信じていない状況で、神の約束は無効になったのか、神はイスラエルへの祝福を取りやめたのか、と問われました。しかし断じてそうではない！ということのパウロは述べています。神はエリヤの時に 7000 人を残していると言われたように、私たちの思いを超えて今も「残された者」を用意しておられます。神は私たちの目には隠れた形で、ご自身のみわざを行なうことができるのです。神にとって不可能なことは一つもないのです。そしてさらに先ほど見ましたように、神は不信仰な者たちをかたくなにして、そこからさらなる御心を成し遂げることがこの後、語られて行きます。後の 26 節では「こうして、イスラエルはみな救われる」という言葉が語られます。人間的に考えれば、まさか！と思われるような神の導きです。それを知れば、33 節のように「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いかな！」と感嘆の賛美を發さずにいられ

ません。なお今後詳しく見て行くとして、ここですでに言えることは神の約束は確かであり、真実であるということです。ですから私たちはすべてが流動的な状況においても、神の約束にしっかり目を止めて行けば良いのです。自分勝手な判断で悲観的にならなくて良いのです。神は最も信頼できる方、私たちの思いを超えて約束を実現されるお方です。

これと合わせて押さえておきたいもう一つのことは、だからと言って私たちの歩みはどうしても良いかのように考えてはならないということです。この神の真実についての素晴らしい事実は私たち人間の責任を軽くするものではありません。7節以降で福音に従わない彼らを神はかたくなにして、イスラエルに祝福が戻るようにされると語られますが、だからと言ってその人々を救うとまでは言われていません。その人々は頑なにされて、益々神から離れて、引き返せなくなるのです。このローマ書 11 章の話は民族的イスラエルは一人残らず救われるということではないのです。神は不従順な者たちをも用いてイスラエルへの祝福を取り出して行かれますが、しかし一人一人の応答には責任があるのです。神の主権と人間の責任の関係は、私たちの頭の中でうまく両立できなくても、神の前でそれは両方とも成り立つのです。

ですから私たちはこの章で示される神の真実を賛美しつつ、自らのなすべきことにしっかり取り組みたいのです。すなわち福音において差し出されている神の義を感謝して受け取りたい。ただ恵みのゆえに、イエス・キリストへの信仰を通して神との正しい関係に立たせていただく祝福に進みたい。その応答とセットで、実は私は神の選びの恵みをいただいて、この歩みを導かれているのだと知る驚くべき幸いに生きる者となるのです。そして一切の栄光をただ神にのみ帰して、この神を永遠に喜ぶという、私たち人間にとってこれ以上ない最も幸いな歩みへ導かれて行くのです。